
もう一つの大空

真菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つの大空

【Nコード】

N9092Y

【作者名】

真菜

【あらすじ】

成績優秀スポーツ万能の市。そんな彼女の元に突然現れたりボーン。彼との出会いが運命を大きく変える！ セツタンセツテの読みきりを読んでいたとき、ツナに姉がいたと知って、成績が優秀だった（らしい）姉がボスだったらどうなるんだろーなーという考えから作りました。

標的 1 リボン来る！

「市！そっちに行つたよ！」

「OK！」

スパアン

「やったーっ！」

アタシは沢田市。

並盛中学に通う中学二年生。

自分で言うのもなんだけど、勉強にスポーツ、何をとっても指折りの学校トップクラスの成績を誇る。

コートを片付けると、アタシは彼の元へと駆けていった。

「恭ちゃんっ！や・く・そ・く」

「ハア。分かったよ。買えばいいんでしょ、ケーキ」

彼は我が並中の象徴ともいえる、風紀委員長の雲雀恭弥。

年齢不詳でアタシが入学したときには既に風紀委員長の座についていた強者。

アタシはそんな彼の元で風紀委員長補佐と言う役職についている。

おかげで彼と仲良くなることができたし、部活の試合のたびに「褒美を買ってくれる。」

「但し、一つだけね」

けど、頑固なのがたまにキズ。

「え〜」

「そんな態度を取るなら、次から買ってあげないよ」

「ゴメンチャイツ」

「買ってあげない」

「すみませんっした!」

「……言葉には気をつけなよ」

それだけ言うと、恭ちゃんは体育館から出て行った。

あゝケーキのためとはいえ、頭下げちゃったな。

ま、いつか

よし、家に帰ろう。

歩くこと二十分。

そこにアタシの家がある。

「ただいまーっ」

「イツちゃんお帰り。帰ってきて早速なんだけど」

「分かってるって。ツナの勉強でしょ？」

バツが悪そうな顔をする母さん。

アタシには弟がいる。

アタシとは正反対で、勉強もスポーツも何をやらせてもダメダメで、学校で指折りのトップクラスの頭の悪さを誇る。

いや、誇っちゃダメだけど。

皆は彼をダメツナと呼ぶ。

「いいじゃない母さん。今がダメな分、将来が楽しみでしょ」

アタシだって始めから何でもできたわけじゃない。

人は努力次第で変われることをツナに教えたくて、アタシは自らツナの家教師を進んで受けた。

コンコン

「ツナ？入るよ」

ガチャッ

「わっ姉さん！？勝手に入らないでよ！」

「いま、ノックと断りを入れたからね？」

散らかった部屋に寝転がり、ひたすらゲームをやる弟。

あたしは呆れながらも部屋の片づけを始める。

「ほうら、ツナもさっさと片付けなさい。勉強やるわよ」

「またー！？どうせ何やったってダメツナなんだからほっといてくれよ！」

「ツナ！」

文句を言うツナに思わず声を荒げてしまう。

「ツナ、最初から何でもできる人なんて一人もいない。アタシだって昔はツナみたいにダメダメだったんだから」

「え？姉さんが？」

「人は変わる”。アタシはそう信じてる」

「……いじめ」

「分かればいいのよ」

アタシはツナの頭をクシャクシャと撫でた。

そして机にノートと教科書を広げる。

「さ、始めましょ」

涼を求めるために大きく開け放たれた窓から聞こえるスズメの声で目が覚めた。

ツナの部屋。

どうやら勉強したまま眠ったらしい。

ツナはベッドですやすやすと寝ていた。

アタシはツナを起こさないようにそつと部屋を出ると、自分の部屋に戻った。

まだ朝早い。

二度寝しても大丈夫そうね。

「おやすみ」

誰かに言ったわけではなかった。

だから、返事が返ってきたとき、心臓が止まるかと思った。

黒いボルサリーノに黒いスーツ。

黄色のおしゃぶりを持ち、ボルサリーノにはカメレオンを乗せた赤ちゃん。

「……………」

「ちゃオッス。お前が沢田市だな」

「……………」

「少し早く来ちまったが問題ねーな」

「……………」

「黙ってないで何かいったらどうだ？」

「……………きゃあああああああ！……！」

結論。悲鳴を上げる。

だってそうすればツナか母さんがおきるでしょ？

……現実そう甘くないね。

どうして誰もおきてくれないのかしら。

拳銃の果てに赤ちゃんに銃を突きつけられた。

「ア、アハハ……。危ないなあ、そんな物騒なものは赤ちゃんが持つてはいけないのよ?」

と言うよりここは日本だけだね。

銃を近づけられて両手を挙げる。

……って「おもちゃじゃん!」

「うーむ。このアタシがおもちゃで脅されるとは……」

そう呟くと赤ちゃんは小さく反応した。

「よくおもちゃって気付いたな。よし、合格だ」

「合格……って何が？」

「オレはお前の家庭教師としてきた、リボンだ」

「ボク、ちょっと待ってってね？」

手早く携帯を取り出して番号を押す。

そして呼び出し音になる。

ガチャッ

『もしもし』

「もしもし、警察ですか？」

ズガン

一瞬だった。

ほんの一瞬のうちにアタシの形態は粉々に打ち砕かれた。

『イツちゃん、どうしたの？今、変な音が聞こえたけど』

今頃か！今の音で起きたのか母さん！

鈍感すぎるぞ！

部屋を飛び出て母さんの元へ行く。

「母さんどういうことよ！アタシの部屋に家庭教師を名乗る変な赤ちゃんがいるんだけど！！！」

「家庭教師？」

あれ？と言う顔をする母さん。

もしかして母さんの仕業じゃない？

ってことはやっぱりあの赤ちゃんは不法侵入で……

「まあ早いわね。昨日の夜に電話したのに……あらいっちゃん。母さんをどこに連れて行くの？」

「外」

母さんの手を引っ張って外に出る。

一体何なのよこの母親は！

天然で自分の行動に悪気は一切ない。

この人には誰も勝てないわね。

「どういふことか説明して頂戴」

「ほら、市も来年は受験生でしょ？今の子達は一年生から勉強してるって言うし、市はツナの手倒れも見てくれるから、自分の勉強を怠ってないか心配なのよ。そしたら昨日の夕刊に面白いチラシが入

つてたの」

「見せて」

差し出されたチラシをひったくるように取る。

なになに……

“お子様を次世代のニューリーダーに育てます。学年・教科を問わず。 リボン”

怪しすぎるでしょ！

「そもそもアタシに家庭教師なんて要らないわ。三年になったら塾にいけばいい話でしょ!？」

溜息をつきながらもつ一度チラシに目を落とす。

あれ？リボン？確かさっきの赤ちゃんの名前も……

まさかのマジな話!？

「ハア。今度からこーゆー話は本人に相談してからにしてほしいわ」

乱暴にドアを閉めて自分の部屋に戻った。

案の定、リボンが待っていた。

「話は終わったか？」

「ええ。一応あなたが家庭教師ってことは信じてあげるわ」

「随分と上から目線だな」

だって年上なもの。

「それで一体何者なの？ただの家庭教師なわけではないわよね？」

「流石だな」

何でだろう。

いちいち馬鹿にされてる気がする。

「教えてやる。オレの本当の仕事は、お前をマフィアのボスにする
ことだ」

「へ〜ふ〜ん……つて、ええええ!!?!?!?」

「オレはある男から、お前を立派なボスに教育するように依頼され
てんだ」

その人のところに抗議に行きたい気分だわ。

「やり方はオレに任されている。一発撃つとくか?」

そついうとライフルをアタシに向けてきた。

「ちよつ何する気!?!?」

「でも今じゃない」

そのときだった。

ぐるる

リボーンのお腹がなった。

「あばよ」

風のように現れて、風のように去って行ったりボーンだった。

部屋には時計の音だけが響いている。

時計の音が……………

「きゃあああああ！！」

不覚にも本日二度目の悲鳴。

「母さん！食パン一枚頂戴！遅刻する！恭ちゃんに咬み殺される！」

慌てて家を飛び出す。

恭ちゃんに約束された“風紀委員登校時間”まで、あと五分。

アタシじゃどうがんばっても十分はかかる。

「オレが手伝ってやろうか？」

チャキという音と共に聞こえてきたりポーンの声。

見ると、塀の上にラジコンのような物に乗ってついてくるりポーン
の姿があった。

「銃を手にして何を手伝うって言うのよー！」

「お前を殺すだけだ」

「ちーばー！」

“殺す”と言うワードが聞こえてきた瞬間に全力ダッシュ。

殺されてたまるもんですかっ

何とか撒いたかな？と思ったら、今度は小さなバイクに乗って追いついてきた。

銃をアタシに向けて。

「嫌ああああっ！！」

速すぎるよ！バイクなんて卑怯だよ~~~~！！

これこそまさに「リアル鬼ごっこだぞ」……っって

「台詞を取らないでよー！」

「よそ見していると撃つぞ」

「なんでこーなるのよー……！」

そのままアタシは、リポーンと言つ名の恐怖を後ろに見ながら学校へと走つていった。

標的 2 死ぬ気弾来る！

「はあ…はあ…。何とか間に合った」

自己新記録三分。

リボーンのおかげ？

いやいや、アレは単純に人としての根性でしょ。

いわば鍛冶場の馬鹿力、的な？

「アタシは…佐藤じゃ…ない…っつの…」

「佐藤がどうしたの？」

「きょ…恭ちゃん。ううん、何でもない」

いつの間に行ったの？

声が聞こえたとき、リボンかと思って心臓が止まりかけましてよ？

「君がなかなか来ないから咬み殺しに行こうかと思ってたところだよ」

遅刻しなくてよかったと心のそこから思う。

「今日も仕事が溜まってから、早く書類持ってってね」

「了解」

風紀委員の仕事は、基本的に教室でこなしている。

今現在、委員会は部活と違って専用の部屋がない。

恭ちゃんが造ってくればいい話なんだけどそんなことをいってる暇もないから、私は教室で仕事をしている。

因みに、恭ちゃん曰く、授業よりも仕事を最優先しろ。

絶対におかしいわよね？

いつもそう思いながら書類を手に教室へ向かう。

途中で友達と会い、喋りながら歩く、その時だった。

ザワザワ

「なんだか外が騒がしいわね」

「そうだね。あれっ？誰か走ってくるよ」

言われて窓の外を見ると、地平線の彼方（笑）から走ってくる人影があった。

パンツ一丁で一心不乱（？）に走っている。

あゝ変態がいる。

あゝ風紀が乱れる。

「あれって、市の弟じゃない？」

「え!？」

あるつことか、その変態はアタシの弟・ツナだった。

「知りませぬっ! 私^{ワタクシ}はあのような変態は存じませぬわっ!」

全力ダッシュでその場から逃げる。

後ろからの友の目が痛いけれど、気にしませんわっ!

「最悪だわ……………」

何なの……………何をしているのよツナは。

これじゃあアタシのメンツがガタ落ちじゃない！

イライラしながら書類を整理する。

「ツナの……バカ……」

「ツナは悪くねーぞ」

この声…。

振り返ると、窓枠にリボンが立っていた。

思わずその胸倉をつかむ。

「一体何なの！？アンタは、アタシを辱めるために来たの！？」

「気安くオレに触るな」

額に銃口が当てられる。

ひしひしと伝わってくる殺気。

フツ。これ以上アタシが何かしたらいつでも殺せるってワケね。

オーケー。

ゆっくり手を離す。

「オレがツナに撃ったのはこれだ」

目の前に出された何か。

それは弾だった。

「これは死ぬ気弾と言って、これで脳天を貫かれたものは一度死んでから死ぬ気になって生き返る」

「死ぬ気…?」

「死ぬ気になる内容は、死んだとき後悔したことだ。今回のツナの

場合は『笹川京子に告白する』って言う物だぞ」

…既に頭が容量オーバーしてるわよ？

でも…えっと…要するに…リボンがこの弾をツナに撃って？ツナが京子に告白できないのを後悔して？死ぬ気になってあの姿……？

「なんて納得できるわけないでしょ！」

必殺 卓袱台返しならぬ書類返し。

まとめてあつた書類が宙を舞う。

後片付けが大変だから、よい子は真似しないでね

「死ぬ気弾なんて聞いたことないわ！」

「死ぬ気弾はボンゴレファミリーに伝わる秘弾だ」

「ボンゴレファミリー？」

「オレは、ボンゴレファミリーのボス、ボンゴレ9世の依頼で、お前を立派なマフィアのボスに教育するために日本に来た」

話がむちゃくちゃ過ぎて全くついていけないわ。

死ぬ気弾を撃たれたツナなら、この話を信じるのかしら？

「ボンゴレ9世は高齢ということもあって、ボスの座を10代目に引き渡すつもりだったんだ」

なら、アタシじゃなくても適任者はいるんじゃないのかしら。

「だが、10代目最有力者のエンリコが抗争中に撃たれた。若手？2のマッシーモは沈められ、秘蔵っ子のフェデリコはいつの間にか骨に」

言いながらリボーンは三枚の写真を取り出した。

全てその人たちと思われる死体の写真。

……それって、乙女に見せるもんじゃないわよ。

「それで、10代目候補として残ったのがお前なんだ」

「チヨイ待った！話が飛びすぎてるわよ！」

「ボンゴレファミリーの初代ボスは早々に引退し、日本に渡ったんだ。それが市のひいひいひいじいさんだ。つまりお前はボンゴレファミリーの血を引くれっきとしたボス候補なんだ」

「何言ってるのよ」

アタシ達のご先祖様がマフィアのボス！？

信じられない。

「それなら、ツナでもよかったんじゃないの？あの子だって同じ血を引いてるはずよ」

「9世はお前を指名してるんだ」

理不尽だ。

恭ちゃん以上に理不尽な話だわ。

「心配しなくてもオレが立派なマフィアのボスにしてやる」

「そーゆー問題じゃなくて！」

「んじゃあ、帰るな。オレはお前がボスになるまでずっと一緒にいるぞ」

それだけ言うと、リボーンはパラシュートに乗って姿を消した。

教室にはアタシと書類と静寂だけが取り残された。

散らばった書類を拾って揃える。

その間にもリボーンの言葉が頭から離れなかった。

『お前はボンゴレファミリーの血を受け継ぐれっきとしたボス候補なんだ』

アタシが、マフィアのボス……。

今までの平穏な日々が音を立てて崩れるのが聞こえた気がした。

「姉さん、ごめん」

家に帰って最初に聞いたのは、ツナのこの言葉だった。

「オレのせいだ……」

「話はリボンから聞いたわ。京子に告白したんだって？」

「……」

うつむいてしまう弟。

「ツナ」

「えっちょっと姉さん!？」

アタシはツナをそっと抱き寄せた。

「ツナ、昨日アタシが言ったこと覚えてる？」

「うん。人は変わる、でしょ?」

「そう。人は変わる。どんな人だっていつか変わらなければいけない」

「……………?」

抱き寄せていたツナを離し、頭に手を乗せた。

「男の子が変わるべきなのは勇気。ツナには勇気が十分に備わっている」

「オレに勇気なんて…」

「それに、女の子は勇気ある人を好くものよ」

「!?!」

手を下ろしてリビングに入る。

そして、ツナに背を向ける形でソファに座ると、小さく溜息をついた。

「明日は一騒動ありそうね」

「え?」

「アンタが京子に告白したとなると、一人五月蠅いのがいるのよね」

ツナは意味が分からなかったようで、うぐぐんと考え込んだ。

そして、あつと声を出した。

「もし…かして、持田先輩？」

「う」名答」

そう。あたしのクラスメイトである、剣道部主将・持田。

そいつは自称京子の彼氏なのだ。

あたふめくツナを余所に、アタシは明日どうするかを考えながら部屋に向かった。

「な!？」

アタシの部屋は結構変わっていた。

あちこちにトラップが仕掛けられ、その真ん中（つまりはアタシのベッド）で堂々と寝ているリボン。

「人の部屋で寝るな　　っ!」

標的3 VS 持田来る！

「い〜ちっ」

教室に入るなり、誰かに名前を呼ばれた。

「おっはよ」

次の瞬間、アタシに危険な物が突っ込んできた。

「ほぶつ。いったいなあ、何すんによ菜摘！」

「へっへ〜ん」

その正体はアタシの親友、星風菜摘。

眼鏡っ娘の巨乳ちゃんがトレードマークの彼女は、典型的なお嬢様育ち。

のはずなのに、行動の一つとってもお嬢様とは思えない。

「市。さっきね、持田が綱吉クンに勝負吹っかけに行ったよ」

「やっぱり?」

「どうやら、アタシの予感は的中したようね。」

「それで、剣道勝負するんだって。行こっ」

「ちょっと待ってよ。ツナは剣道は愚か、運動全般ダメなのよ」

「だからこそ見物なんじゃん。ほら早く」

菜摘に手を引かれ、連れられるままに道場へと向かった。

見物って、アンタは人の弟をなんだと思ってるのよ。

道場に着くと、野次で溢れかえっていた。

「ここにいる奴ら全員、恭ちゃんに咬み殺されればいいのに」

しばらくすると、剣道部員に運ばれて、ツナが姿を現した。

「貴様は剣道初心者だからハンデをやる。十分間に一本でもオレから取ることができれば貴様の勝ち、できなければオレの勝ちとする！」

あらまあ、あの外道にしては随分なハンデじゃない。

でも、ツナの運動オンチはそのハンデを持ってしても埋まるかどうか……。

「商品はもちろん、笹川京子だ!!」

前言撤回。やっぱり外道だわ。

「ツナ！男ならしつかり勝って見せなさい！沢田家の人間たる物、勝負に勝って然るべきよ!!」

「姉さん……。それ、プレッシャーにしかない……」

あれ？そうなの？

まったく情けないわね。それでもアタシの弟かしら？

「無駄なことだ沢田市。お前の弟はオレの手によって葬り去ってやる」

「ひいっ！」

「外道のあなたにそんなことができるかしら？」

ちょうどその時、道場の天井で何かが光った。

そして次の瞬間。

ズガン

多分、殆どの人が気付いていない銃声。

そして、倒れるツナ。

どうしてリボーンはすぐに死ぬ気弾を撃っちゃうのかしらね。

周りにいる人たちは、何が起こったのかは理解していない。

もちろん菜摘も同じ。

「あ、あれ？綱吉くんどうしたの？」

「ま、見ててあげて」

アタシは目を逸らしたいくらいだけどね。

「復活^{リ・ボーン}！！死ぬ気で一本取る！！」

ツナの死ぬ気タイムが始まった。

「ぶあかの極みだな沢田綱吉！だがオレの勝ちは決まっているのだ
」！

むう。なんだかイラつきますわ。

持田は竹刀を振り下ろし、ツナはパンツ丁で突っ込んでいく。

なんだかシユールな光景よね。

持田が振り下ろした竹刀がツナの額をうち、誰もが面を取ったと思
った。

けれど、ツナの勢いがとまるはずもなく、竹刀を割るに至った。

しかもそれでも勢いは衰えることなく、そのまま持田に頭突きをし
た。

「ねえ市。あれって本当にアンタの弟？」

「知りません」

そしてツナは、右手を振り上げると、

ブチブチッ

持田^{バカ}の髪の毛を引っこ抜いた。

一瞬の静寂。

そして笑いの嵐。

「ツナの奴考えたな！」

「確かに何を一本とるかは言っていなかったもんな！」

あちこちから聞こえる声。

言われてみればそうかもしれないわね。

さて、判定の結果は……

「……………」

旗が上がらない。

ま、そりゃあ持田の後輩だもんね。

ツナはどうするのかしら。

いつもならば諦めるけれど、今は死ぬ気だし…。

「これでダメなら！」

そういうと、ツナは持田の髪を全て引っこ抜いた。

見事な坊主頭の出来上がり。

「な〜む〜（チーン）」

見事に菜摘とハモった。

「さて審判さん。これで持田はもう戦えないわ。それでもまだ旗を揚げないというのなら……」

あたしが相手をしてあげてもいいのよ（ニコッ）「

「ひいっ 赤！勝者、沢田綱吉！！」

高々と揚げられたツナの勝利を示す旗。

そして、沸きあがる歓声。

「すげえよツナ！」

「見直したぜ！」

気付けば、ツナは沢山の人に囲まれて、褒め称える言葉をかけられていた。

アタシの肩に誰かの手が乗せられた。

「よかったね、市」

「菜摘……。ええ、そうね」

その後、ツナが京子に声をかけられているのを見て安心したアタシ

達は、そそくさと教室へ戻った。

後ろからリボーンの視線を感じながら。

家へ帰ったアタシを出迎えたのは、盛大な爆発音。

場所はアタシの部屋。

そして、パラシュートで飛んでいくリボーン。

「ちょっと!?!何やってんのよ」

慌てて部屋に駆け込むと、アタシの部屋はメチャクチャになっていて、黒焦げになったツナが倒れていた。

「もう、人の部屋で何やってんのよ」

「っ!?!」

夕暮れの空に、アタシの音が虚しく響いた。

標的 4 転校生来る！

マフィアのボス …

それは裏社会に君臨する闇の支配者

何人もの信頼できる部下を片手で動かし

ファミリーのためなら自らの命を張ることも厭わない

彼等の周りには信望と尊敬の念が取り巻き

スラムの少年はヒーローとあがめたてる…

「へえ、そうなのか」

「あなたが無理矢理読ませてるんでしょ!!」

今アタシが読んでいたのは、“マフィアのすべて”。

どうしてこんなのを読んでいるのかというと、リボン曰く、

「毎日読めよ。お前はファミリー10代目ボスになる奴なんだからな」

だそうよ。

まったく、アタシはマフィアのボスになんかならないって言うてるのね」

「心配いらねーぞ。後はこっちで勝手にやるから」

あ、声に出た？

って言うか、勝手に人の心を読まないでほしいわ。

「はあ〜」

「どうしたの、溜息ばかりついて」

「あつゝ恭ちゃん聞いてよあ〜」

「何が？」

恭ちゃんに話してみた。

彼が信じてくれるかどうかは分からないけど、何となく全てを話してみた。

突然現れた赤ん坊、リボーン。

マフィアの次期ボス候補だと言われたアタシ。

何故かツナに使用される死ぬ気弾。

「ねえ」

ずっと黙って話を聞いていた恭ちゃんが口を開いた。

「君、熱でもあるの？」

「狂ってない！アタシはちっとも狂って何かいないわよお！」

「五月蠅い」

「……………はい」

酷いよ恭ちゃん……………。

むーそんなに信じられないことかしら。

紅茶を静かに啜る。

因みに今は応接室にいる。

「獄寺隼人……………」

「はい？」

「今日、君の弟のクラスに獄寺隼人って言う転校生が来たはずだ」

「ふうん。で？」

「彼はイタリアからの帰国子女らしいからね。その赤ん坊もイタリアから来たって言うのが本当なら、その彼に聞いてみるといいよ」

アハハー馬鹿ですね恭ちゃん。

一般人がどうして殺し屋を知っているのですか。

まさか恭ちゃんがそこまで馬鹿だったなんて思いもしなかったわ。

「今考えていたこと、全部口に言ってみて」

うっ……。

「ムリ」

「咬み殺すよ」

「いいやあ」

っ……!」

ムリムリムリ！本つつ当にムリだからね！？

こんなんじゃ言わなくたって咬み殺されるじゃないの！！？

叫びながら応接室を飛び出す。

廊下にいた人たちが変な目で見てきたけれど、そんな事気にしていない場合じゃないわっ！

「ハア…ハア…。流石の恭ちゃんも…ここまではこないよね…」

走りに走りまくってたどり着いたのは、並中を出て五分走ったところの路地裏。

誰もついてきていないことを確かめて、アタシはその場に座り込んだ。

「目に余るやわさだぜ」

！！？

「誰！？」

驚いて立ち上がる。

振り返ると、道の奥　つまりはアタシがいるところよりも更に路地裏に入り込んだところに立つ一人の少年がいた。

暗くて顔までは分からない。

「並盛中学3 - A　沢田市」

「！？　あなた誰？どうしてアタシの名前を」

知っているのは全校生徒。

「質問を替えるわ。今はまだ学校の時間よ？どうしてこんな所にい

るのかしら?」

ハッキリ言って人の事いえないのだけれど。

「オレはテメーを10代目だとは認めねえ」

「どうしてそれを…?名乗りなさい少年。そっただけ情報を持っているなんてずるいんじゃない?」

この人が並中の生徒ならば、名前を聞けば分かるはず。

これでも並中の生徒の名前と顔は全員覚えているのよ。

ま、風紀委員の絶対条件なんだけどね。

「オレは獄寺隼人」

「え!?!今日来た転校生!?!」

アハハ……彼もマフィアがらみだったのね……。

笑えないわよ。

「10代目にはオレになる。消えな」

彼が取り出したのは……ダイナマイトオオツ!?

チッ。

目の前を何かが通り過ぎ、ダイナマイトの火を消した。

「ちっ」

「早かったな、獄寺」

「な!リボーン!」

ダイナマイトを消したのはリボーンだった。

「ちょっとリボーン!何でアタシが転校生に命狙われてるの!?!?」

「アンタが9代目が最も信頼しているって言う殺し屋のリボーンか」

「そーだぞ」

リボーンに話しかける獄寺とやら。

9代目が最も信頼してる…って、リボーンってどんだけすいいのよ。

「っていつか、獄寺はリボーンを知っているの？」

「オレが獄寺こいじを呼んだんだぞ。ま、会うのは初めてだけだな」

あ、そ。

「オレが勝つたら10代目確定って言うのは本当なんだろうな」

……はい？

この人、今なんて

「本当だぞ」

「待てい！アンタ、あたししか10代目になれないって言ってたわよね？アレは嘘だったのかしら！？」

「ちげーぞ。戦えって言ってんだ」

このガキ……簡単に言ってくれるじゃないの。

ジュッ

アタシとリボンがいがみ合っている間に、獄寺はダイナマイトの着火を済ませてしまった。

「果てな」

「あ……」

死ぬかもしれないって言うときに、ふとあることを思い出した。

「生徒の武器の所持は校則によって認められていません。よって、校則違反として、獄寺隼人、あなたを成敗させていただきます！」

近くの木を折り、その枝で残り僅かとなった導火線を切った。

へえ〜。枝で物って切れるのね。

「ようやくやる気になったか」

「いいえ」

「!?!」

「アタシは風紀委員長補佐としての役割を果たすだけよ」

枝を何本かに折り分けて、短刀のように構えた。

「行くぜ、2倍ボム！」

「やせない!」

地面を蹴り、飛んでくる相手の武器の中突っ込んでいく。

持ち前の運動神経で、一つ一つの確に導火線を切っていく。

「くっ。2倍ボム！」

「同じ技は二度と効かないわよ」

さっきの二倍のスピードでダイナマイトを処理していく。

相手の顔に焦りが見えた。

「さ、3倍ボム」

「遅い！」

最初に放った分の三倍の量のダイナマイトが彼の手の手の中にある。

だから“3倍ボム”なのだろう。

だからと言ってアタシにとっては何でもない。

放たれる前に全てを切り捨てる。

「くそっ」

「そ・れ・と。タバコは体に悪いのよ」

最後に彼のタバコを消して、大きく跳躍して背を向ける形で着地した。

背後で、成す術をなくした獄寺が崩れ落ちる音がした。

傍から見たら特撮ヒーローのワンシーンね。ヒーローが敵を倒して、背後でドガンみたいなの。

「御見逸れしました!」

「へ?」

ビックリして振り返る。

獄寺が土下座をしていた。

「オレが10代目になるうなんてこれっぽっちも思っていないせん。ただ、候補が女性だと知って気になったんです。しかしあなたは、オレの予想をはるかに超え、強く優しかった」

今の流れに優しい部分を見つけた人手を挙げて。

ふむ。いない。

「アタシはただ、風紀委員としての役割を果たしただけよ」

「一生ついていきます!」

話を聞け!

「よかったじゃねーか。部下第一号だな」

「あのねえ!」

冗談じゃないわよ！

部下だなんて余計にマフィアっぽくなってるし！！

アタシはボスにはならないって言ってるのに……。

「えっあれっつ！？ご、獄寺君！？」

「なっ沢田って10代目の弟！？」

顔を合わせるなり驚きまくる二人。

そういえば、この二人は同じクラスだったわね。

今はアタシの家にいる。

リボーンのコマンドによって隼人君を家に連れてくることになった。

「あー、同じクラスなら紹介はいらない…カナ？」

「何言ってるんだ。ボスならファミリーの紹介ぐらいしやがれ」

銃が向けられる。

「アタシはボスじゃないし、ファミリーなんていらねえ。隼人君だつて友達の方がいいと」

ズキュウン

「ひいっ!」

情けないわよツナ。男の子がそんな声出すもんじゃないわ。

とか言いつつも、アタシも足がすくんでいた。

だって…だって、銃弾がアタシの顔の一ミリ横を通って行ったのよ！？

これが平気な人っている！？

「わかったわよ！やるから！やるから銃を下ろしてちょうだい！！」

「ちっ」

舌打ち！？

今舌打ちが聞こえたよ！？

「え…とツナ、こっちは獄寺隼人君。なんて言うのかしら、ともだち「部下だ」…はい、部下ね。それで隼人君、こっちはアタシの弟の綱吉。運動や勉強は人より劣るかもしれないけど、優しい心や勇氣は誰にも負けないわ」

「ちょ…姉さんてば…」

紹介が終わると、ツナは顔を赤らめて俯いてしまった。

ん？本当のことしか言っていないけど？

そんな時、台所から母さんが顔をのぞかせた。

「獄寺君、よかったら夕食食べていかない？」

「！いいんですか？オレなんかお邪魔しても…」

「母さんがいって言えばいいのよ。食べて行きなさい、隼人君」

「10代目がそう仰るならご馳走になります」

ツナやリボンも承諾し、その日の夕食は賑やかな物となった。

ま、マフィアはイヤだけど、こういうのは有りかもね。

標的5 天然野球少年来る！

「市、ちょっといいかい？」

「どーしたの？恭ちゃん」

突然呼ばれて恭ちゃんのところへ行くと、手渡されたのは一枚の紙。

それは野球部の一人ひとりの最近の成績をまとめた書類のうちの一枚。

「彼、どう思う？」

「武君かぁ。そうねえ、成績が右肩下がりにじゃない」

一年にして野球部エースの山本武。

ツナのクラスメイトで彼の数少ない親友の一人でもある。

そんな武君の最近の成績はガタ落ちだった。

「このままだとスタメン落ちね……って何でアタシに聞くの？」

「君の弟、彼と同じクラスなんでしょ？だから、彼に絶対に落ちないように言っておいてくれる？」

え〜メンドくさ〜い。

自分で言えばいいじゃないの〜。

「じゃないと咬み殺すから」

「任務はしっかり遂行します！」

「…そう」

脅迫してるくせに何でそんな哀れみの目で見てくるのかしら。

それとも、脅迫してるって言う自覚がなかったり？

「と、言っことなのよ」

「ええ！？」

アタシから言うのも難だから、ツナに伝言を頼みに1 - Aに出向いた。

来るなら自分で言えばいいのに、と呆れられたけどね。

「風紀委員に言われたら武君にプレッシャーかけちゃうでしょ？」

折角のツナの親友なんだし応援でもしてあげて？

ね？いいでしょ？姉さんの頼み」

とびっきりの笑顔でお願いする。

こうすると、ツナは絶対に頼みごとを聞いてくれる。

小さい頃はかわいい笑顔で答えてくれたのに、最近は何故かツナの顔が引きつってるのが気になるのだけだ。

「じゃ、お願いね？」

「ちょっと待って！」

「ん〜？」

呼び止められて立ち止まる。

「あの…さ。最近獄寺君が学校に着てないんだけど…」

ああ。隼人君のことね。

「隼人君なら、ダイナマイトの仕入れに行くって言ってたから、
週間くらいは学校に来ないわ」

あの日から少したった時、リポーンに聞いた話は驚きだった。

隼人君はイタリアでは少し有名な悪ガキで、通り名まである。

タバコを吸いダイナマイトを扱うことから、『スモークン・ボム・隼人』と呼ばれ、

しかも体のいたるところにダイナマイトを隠し持っているらしい。

そして今、そのダイナマイトが切れてしまい、今朝仕入れに行つてくるとメールが入っていた。

「……………獄寺君もマフィア関係だったの……………？」

「らしいわね。とにかく頼んだわよ」

心から残念そうな顔をしているツナを置いて、アタシは1-Aの教室を後にした。

次の日、あたしは重いマットを運んでいた。

「お…重い…」

理由は、体育委員会が準備をサボったから。

体育の授業で使う大きなマットを半ば引きずるようになして運ぶ。

もうっ誰か手伝ってくれればいいのに。

菜摘とか菜摘とか菜摘とか。

つまりは菜摘に手伝ってもらいたいのよ。

あの子、ああ見えて力持ちだから。

あまりの重さに疲れ果て、マットの上に転がってフカフカと堪能しているときだった。

「きゃああっ！」

悲鳴！？

声のしたほうを見ると、場所は屋上。

そして落ちてくる二つの影。

って飛び降り自殺！？

させるかつ風紀が乱れる！

「風紀を乱すものはあ…何人たりともあ…成敗ッ！！！」

大して離れていないから急げば間に合う。

そう思ってマットをつかんで走り出した。

「武君、ツナ！？」

あるつことか、その二人は弟とその親友。

的確にマットを置き、ツナに向かって叫んだ。

「ここよツナ！このマットに飛び込みなさい！」

ツナは言葉通りに、武君をつかんでマットの上に落ちた。

一瞬しか見えなかったけど、死ぬ気モードだったわね。。。

「いつつつ…あ…ありがとう、姉さん」

「悪かったなツナ。やっぱりバカがふさぐとロクなことがないってな」

「まったく…。飛び降りなんて何を考えてるのよ」

話を聞くと、昨日練習のしすぎで骨折をした武君は、野球ができないなら死んだ方がましだと考えたらしい。

「生きていたからいいものの、今後は二度とこんなことをしないでね？」

「ああ。ツナのおかげで頑張ろって気になれたしな」

「そう。それはよかったわ。でも今は今でバツを与えないとね」

その一言でツナと武君の笑顔が固まった。

ツナは何回か口をパクパクして、ようやく声を出した。

「ば…バツって…ヒバリさんみたいに咬み殺されるの…？」

「？ あ、あははっ違うわよ。このマットを運ぶのを手伝ってもらっただけよ」

そういって、ツナと武君の目が点になった。

「え？マットを？」

でもさつき姉さん、一人で運んでたよね？」

そーなのよね。

無我夢中だったから気にしなかったけど、このマット、一人で持ち上げちゃったのよね。

「でも今はもてないわ　きっとあれよ…えーっと鍛冶場の馬鹿力的な？」

「な!!!？」

「ははっツナのねーちゃんって面白えのな。まあ、女で一つでつてのも大変だし、オレも悪かったから手伝うぜ」

「ありがとう武君」

三人で持つと、一人のときよりずっと軽かった。

ツナがフラフラで危険だったけど、その分武君が支えてくれたおかげで何とか授業に間に合った。

教室に行くと、何故か菜摘が笑っていた。

……なんで？

「おい、市」

「なに？リボン」

「山本武をファミリーに入れるぞ」

「はい!？」

突然何を言い出すのかと思いきや……まさかのファミリー勧誘のはなしだなんて……。

「それとだ。お前がマツトを持ち上げられたのは鍛冶場の馬鹿力な
んかじゃないぞ」

……はい？

「あれは、お前にボスの資質があるからだぞ」

「すぐにボスにつなげないのっ」

「本当だぞ」

あーもう五月蠅い五月蠅い。

マフィアと関わりを持つとろくなことないわよ。

こんなくだらないうちにツナとかツナの友達を巻き込みたくないっ
ての。

「変に皆を巻き込まないでね！」

はあ。

武君になんて説明しよう。。。

標的5 天然野球少年来る！（後書き）

はい、真菜です。

『もう一つの天空』のご愛読ありがとうございます。

お知らせです。

これからは週に一回の投稿になります。

「今まで週一じゃなかったじゃん！」

と、思う人もいるかもしれませんが、それには色々と事情がありました。

標的3までの話は、本当は標的1に収める予定だったのですが、あまりに長いので三分割しちゃいました。てへぺろ キモイわ

なのでその3話は実質1話。

つーことで、これからは週一となります！

標的6 泣き虫ランボ来る！

「答えは？」

「ちゅ…っ？」

「はい没収」

「ああ！オレの漫画！！」

「約束よ？」

今、あたしはツナに勉強を教えている。

いわば家庭教師中。

答えを間違えたらツナのコレクション（漫画やCD）を没収すると言っ、極めて簡単な方法。

「もー……えゝ！？」

「な、何よ?」

「姉さん…アレ…」

ツナが外を指す。

その示す方向を追っていくと…

「な!？」

そこには牛柄の服を着た謎の子供がいた。

今更ながらに、アタシやツナの部屋は二階。

今はツナの部屋で勉強していて、ベランダがあるのはアタシの部屋だけ。

その窓の向こうにその仔牛はいた。

まあ、つまりは木の上にいるってことなのだけど。

「死ね、リボーン！」

どつちやら狙いはアタシの隣で寝るリボーンらしい。

「わーちよっ 姉さんどーするの!？」

「どつする…って…リボーンを起こすしかないんじゃないの?」

「えええ っ!?!無理無理!!殺されるって!！」

無理だといわれても起こすしか手がないのに、他にどつしろって言うのよ。

それこそアタシがヘルプを出しちゃわよ?

「びぐ…びぐ…」

泣き声が聞こえて声の主を見ると、さっきの仔牛が泣いていた。

アタシが理解する限りだと、

リポーンが寝る＝相手を無視する

となる。

つまりは、あの仔牛は無視されたショックで泣いているのね。

メリメリメリッ

バキッ

「ぐびゅっ」

「「!!!?」」

突然仔牛が消えた。

否、落ちたわ。

これは絶対に関わらない方がいいわね。

……よし。

「ね……姉さん？」

「勉強再開」

「え　　っ！！？」

これは不可抗力よ。

うん、そう、不可抗力。

ピポピポピポピポ

………うるさいわね。

ガチャッ

「あら？」

「よおりボーン！オレっちだよ！ランボだよ！」

さっきの仔牛来たあ！？

まさかの展開！？

入ってきた仔牛はリボーンのところへ行くと、眠っているリボーンを叩きだした。

あーあー自殺行為よ。

「うげえ」

結局、目が覚めたりボーンの手によって、その仔牛は壁に叩きつけられた。

「おーいて…何かに躓いちゃった…」

え？躓いた？しかも何かって…。

明らかに自業自得でリボーンに飛ばされてたわよね？

「イタリアから来たボヴィーノファミリーのランボさんは躓いちまった！好物はブドウと飴玉でリボーンを殺しに来たランボさん5歳は躓いちまった！！」

「泣きながら自己紹介してる　！！？」

「どっしょっしょ…これは一体どっすねばいいの！？」

「やっぱりここは…」

「勉強勉強」

「いいの！？」

「ツナも勉強に集中して」

極力仔牛を目に入れないようにして勉強を再開する。

泣き声なんて聞こえない！

聞こえないんだからああ！！

「ね…姉さんが…壊れてきた…」

ガシッ

「壊れてないわ。断じて壊れてないわよ？マフィア云々に関わりを持ちたくないだけよ。いいわねツー君？」 恐怖の笑顔

「は…はい…」

一瞬のツナside

どどどどどししよっ！！

変な牛が突然現れたと思ったら姉さんがおかしくなっちゃったよ！

って言うかあの笑顔ホントに怖いから！

リボンもずっと寝てるしで…あーもー…！

オレはどーしたらいいんだよ…！

s i d e o u t

ドガアンッ

え？今の音の説明？

ヤダ。面倒なもの。

えーと、言うなれば…

無視された仔牛が頑張ってるリボンの注意を引こうとする

それでもなおリボンは寝続ける

キレた仔牛が手榴弾を投げる

一瞬にしておきたりボンがレオンでうちわを作る

打ち返した手榴弾が仔牛に命中

「ぐぴゃあああ~~~~~!!」

トガアーンッ

となるのよ。

「姉さん…それは省略しすぎだと思っよ…」

「あら、そっ?でもこれで勉強に集中できるはずよ。結果オーライ
ね」

「市の言つとおりだぞ。お前は勉強に集中しやがれツナ」

ゲスッ

「ぶっ」

アハハ。まさか蹴りを入れるなんて。アハハ。

「イツちゃん、ちょっといいかしら」

「ん。ツナ、アタシはちょっと席をはずすわ。リボーン、少しの間
ツナの勉強見てあげて?」

「うん」

「わかったぞ」

部屋を出て下に下りる。

そこでアタシを待っていたのは母さんとさっきの仔牛だった。

仔牛はもちろんボロボロで泣いていた。

「この子、リボン君のお友達でしょ？ケンカしちゃった？」

母さん。アレはケンカと言うレベルの話じゃないわ。

「市は一番年上なんだし、二人の仲裁に入っただけ」

「却下よ。アタシはツナの家教師で忙しいのよ。それにケンカなんてリボンたちの問題で」

「じゃ、母さんは夕食の準備をしてるわね」

そう言い残すと、母さんは台所へと姿を消した。

人の話を聞けええ!!!

「えーと、ランボ…だっけ？リボーンとこ行く？」

「やあああああああ!!!」

どちらリボーンは、仔牛に相当な恐怖を植え付けたい。

恐るべし、リボーン。

さてどうしようかしら。

このまま部屋に戻ってもさっきの状態に逆戻りだろうし、リボーンもうるさいだろうし…

「外に行くのでしょうか」

何時間くらいこうしているのから。

高い位置にあった太陽も大きく傾いて、空は紅く染まり始めていた。

それでもアタシは帰れなかった。

「ぐず…ヒク…」

ランボのせいだ。

はあ、そろそろ帰りたいわ。

「10代目」

お、この声は。

「隼人君じゃない。帰ってきたのね」

「はい。ついさっき帰ってきたんで、10代目の家に挨拶に行こうとしていたところっス」

うん。でも一週間の約束が一ヶ月近くになってるわよ？

「それより何スかその牛ガキ」

「それがね……」

（事情説明中）

「リポーンさんを？ たく、10代目の手を煩わせてんじゃねえ」

隼人君。君は物分りがいいし頭の回転も速いけど、短気なのがキズだということに気付いてね？

「ほらランボ。帰るわよ」

「やああああー!」

「あのねえ、早くしないとご飯が」

「(ピタ)」

止まった!?

ご飯って言うワード出しただけで泣き止んだ!?

隼人君も固まってるし。。

「あ、隼人君もご飯食べに来る?」

「え、いいんすか?」

「もちろんよ」

その本音がランボの処理を押し付けたいがため、なんていうのは口が裂けても言えない。

ランボが泣き止んでくれたおかげで、さっさと家に帰ることができた。

後に、母さんが隼人君のことを歓迎してくれたことや、リボンとランボのどつき合いがあったことは言うまでもない。

アタシとツナは、ただただマフィアとはかけ離れた平和な日々を願うのみ。

標的7 10年バズーカ来る！

「イツちゃん、ツツ君、リボン君。ご飯できたわよ」

やっとかあ〜。お腹ペコペコだよ〜。

ダイニングに入ると、既にリボンとツナとランボがいた。

…ん？何でランボ？

「母さん、何でランボがいるの？それになんでツナはノーツッコミなのかしら？」

「やあねえイツちゃん。ランボ君なら昨日から家にいるじゃない」

言われてみればそのよーな気がしなくもないわね。

「それじゃ、回さなくちゃいけない回覧板があるから、ちょっと出かけてくるわね」

「ちよい待てい！」

ボタン

ちっ。逃げられたか。

「……………」

「……………」

「……………（モグモグ）」

「……………（ゴクリ）」

上からツナ、アタシ、リボーン（食事中）、ランボ（ナイフを持ってリボーンを凝視中）。

空気は悪いしランボは危険なこと考えてそうだしツナはあたしにヘルプの視線を送ってくるし……

ムリ　　っ。

「死^ちねりボーン！」

ビュツ ランボがナイフを投げる

キィン リボーンがそれをお皿ではじく

グサツ はじかれたそれがランボに刺さる

「ぐびゃっ」

学習しなさいよランボ。

「が・ま・うわあああん!!」

と、泣き出したランボがモジャ頭の中から紫色の物体を取り出した。

えーとえーと…バズーカ？

ランボはそれを自分に向けて、

カチツ ドン

撃った。

「ええ！？自分に！？」

部屋中に広がる煙。

「ケホツケホツ。何よこれ~~~~」

「ふう〜」

「「！！！？」」

煙の中から男の声。

…誰？

煙が晴れると、そこにはアタシと同じくらいの歳の男子がいた。

…誰？

「初めまして、若きボンゴレ」

「…誰？」

「10年前の自分がお世話になってます。泣き虫だったランボです」

ラン・ン・ボ？

「ええええええ！！？」

面影が0。本当にこれがあのランボなの！？

「オレが撃つたのは10年バズーカといます」

「10年バズーカ？」

ランボがアタシ達に説明したのは次の通り。

10年バズーカとは、被弾者を10年後と入れ替えることのできる、ボヴィーノファミリーに伝わる武器。

入れ替わっていられる時間は5分間。

「へえ」

「世の中には面白い物があるのね」

感心するアタシ達とは反対に、ご飯を食べ続けるリボーン。

「よおりボーン。見違えただろ」

「(モグモグモグ)」

それでもなお無視^{スルー}。

それがランボをキレさせた。

「いいだろう。この10年でオレがどれほど変わったか見せてやる。」

サンダーセット」

掛け声とともに角を装着するランボ。

次の瞬間、雷が落ち、ランボの角が電気を帯びた。

「オレの角は100万Vだ」

「うそー!?!」

「いくぜ、エレクトリック・コルナータ電撃角!?!」

サクツ リボンがフォークでランボを刺す

……「じゅーしょーサマ。

「が・ま……うわああああん!」

「10年経っても泣き虫ですかー!?!」

泣きながらダイニングを飛び出していったランボ。

その直後に玄関が開く音がした。

「こら市！」

アタシですか！？

ってか母さん！？

「二人の仲裁に入ってあげてって言ったでしょ！」

そこには仔牛に戻ったランボがいた。

……5分たったのね。

「ランボ君は、リボーン君と仲良くなりたかったんだって」

「へ？そうなの？」

なあんだ、素直じゃないのね。

それならそうと言ってくれれば、いくらでもアタシが仲立ちしてあげるのに。

「なんてね、死ねリボン！」

ドシユッ

と思っているのは嘘中の嘘。

子供の嘘なんて、いくらでも見破れるわよ。

「うげえ」

ガキイン

リボンに向かって放たれた手榴弾は、いつもの如くはじかれてラ
ンボに命中。^{テッピ}

「ぐぐびやああああ……！」

ランボはそのまま外へと飛ばされていった。

アタシ・ツナ・母さんは啞然。

そしてリポーンは、

「ママン、おかわり」

のんきだった。

標的 8 入ファミリー試験来る！

「くあ〜」

登校中に出るあくび。

今ネコみたいって思ったたら負けよ。

「お、沢田先輩じゃないっすか」

「ふえ？あ、武君。部活かあ、偉いねえ」

またふあ〜とあくびが出る。

「寝不足っすか？」

「ん、まあね」

言えない。

ランボっていうチビツ子が家に来てリボーンを殺そうとして失敗して拳句の果てにウチで預かって世話をしているせいで夜もロクに眠ることもできないなんて言えないわ。

恭ちゃんですら信じてくれなかったのよ？

それを武君に言えるはずがないわ。

「先輩、体には気をつけて」

「あ、ちょっと待って」

校舎に向かって走り出した武君を呼び止める。

「何スか？」

「アタシのことは“市”って呼んでくれて大丈夫よ」

「了解っス。じゃ市さん、また」

今から見回りに向かうアタシとは別方向に走って行く武君を静かに

見送る。

その瞬間、ものすごい寒気と隼人君の叫びが聞こえた気がした。

気がした、なら気のせいよね！

だって今は初夏だもの！

「なあ！？武君に入ファミリー試験を受けさせるですって！？」

今は放課後。

リポーンに呼び出されたアタシは衝撃の言葉を聞かされた。

武君を正式にファミリーに迎えるために試験をするという。

「獄寺を納得させるためだ」

「それでもダメよ！そもそもファミリイとかないのに武君まで巻き込まないで！っていうか、勝手に学校のプールに入るな！」

そう。何故かりボーンは学校のプールにプカプカと浮かんでいた。

「決定事項だ。もう獄寺に山本を呼びに行かせたぞ」

「何でもう勝手に！！」

まったくリボーンったら！

独断が多すぎるのよ！

走っていると、隼人君と武君、そしておろおろしているツナの姿が見えた。

「隼人君！武君！ツナ！」

「じゅ、10代目！」

よかった…まだ大事にはなっていないよね。

一瞬ボムらしきものが見えた気がするけれど。

「あれ？市さんって弟二人でしたっけ？」

「へ？……あゝ」

アタシの腰に紐が括り付けられ、その先にはリボーンがいた。

道理で重いと思った…。

「ちげーぞ。オレは市の家庭教師だ。かてきょう市をボスのマフィアにするのが目的だぞ」

「ちよっ」

「リボーン！」

そんなあつさり言っちゃったら

「ははっ。市さんも結構面白いところあるんスね」

「はい？」

「マフィアなんて面白そーじゃないスか」

……忘れてたわ。

武君は世界有数の天然さんなんだっけ。

どっちかっていうと、武君になら何を言っても問題ない気がしてきたわ。

「山本、お前も市のファミリーになるんだぞ。今日はその試験のために呼んだんだ」

「ファミリー？」

「えっと…その…マフィアのグループ…みたいな感じ？あ、イヤなら入らなかつた方がいいのよ？武君は部活が忙しいものね…あはは…」

「いっすよ」

「は!?!」

「え!?!」

「な!?!」

「ニッ」

上からアタシ・ツナ・隼人君・リボーン。

この説明要らないわね…。

っていうかなんでOKなのかしらね。

そこは空気を読んでさ、「あ、すみません」的なことを言ってよね。

「よし、山本、ツナ。二人で試験を受ける。受からなければファシリには入れねーぞ」

！ そつよ！

試験に受かりさえしなければ、武君をマフィアに巻き込まないで済むわね！！

「因みに不合格は死を意味するぞ」

「はい!?!」

「ははっ。やっぱり面白えな」

「それじゃあ始めるぞ」

そういつてリボンが取り出したのは大量の銃。

「手始めにナイフ」

そして武君とツナに向かってナイフを投げ始めた。

ええ！？銃じゃないの！？それはフェイント！？

「ひゃっ」

「うおっと。いい肩してら」

さ…さすが野球部。難なく避けてるわ…。

それにしてもさー、リポーンはあの二人を殺す気なのかしら？

「にしても」

「？」

「最近のおもちやあってリアルなのな。このナイフなんてすんげー本物っぽいぜ」

「おもちゃじゃないから！」

あー、武君とツナがあんなに遠くに…。

隼人君なんてずっとイライラしっぱなしだし…。

ん？イライラ…。

そうだ！イライラにいいものを常備しているのを忘れてたわ。

「隼人君」

「！ 何スか？10代目」

「イライラはカルシウム不足よ。牛乳を飲みなさい」

アタシが取り出したのは500mlの牛乳。

パックじゃなくてビンなのよ。

「な！」

牛乳を見てシヨックを受けたような顔をする隼人君。

あれ？もしかして牛乳嫌いだったかしら？

「ごめん…嫌いだった？」

「いえ！そんな事ないっす！ただ、野球バカとおんなじことを言われたので…」

武君と？

ああ。隼人君は武君のことが嫌いなのね。

「おい、獄寺。お前もぶっ放せ」

「リポーンさん？」

突然リポーンが隼人君に声をかけた。

もっしもし。隼人君がボム使ったら明らかにあの二人無事じゃな

いわよね。

泣くわよ？泣いていいの？

「隼人君…やり過ぎないようにね…っっていない！？」

既に隼人君の姿はなかった。

もうっ泣いてやるっ！

「ガハハハ！！リボンめーっけ」

この声は…。

「ガハハ！5歳だけど学校に来ちゃったランボさんの登場だもんね
」！」

案の定、ランボがいた。

どうやっていったのか、非常階段のところでした。

できれば家で大人しくしてほしい人物？1・

リボンよりも厄介！

「リボンさん、どうします？」

「続行」

「なあ！？」

ランボに構わず続行宣言。

再び得物を放ちなじめた二人。

あはは…ランボも哀れね。アタシも無視^{スルー}するけど。

と、その時、ランボが何かを取り出した。

モジャモジャの中から。

「パンパカパ〜ン！ミサイルランチャー〜！！」

……ミサイルランチャーって何？

えーっと…本体には穴がいっぱいあって…その一つ一つからミサイルが飛んで出てきて…穴が大体15個くらい…え？そんなに？

ドシュドシュドシュッ

「ちよっリボーン！ランボが撃ってる！！ストップストップ！！」

アタシの抗議は空しく爆音にかき消された。

そして、リボーンは試験を続けている。

ボフィン

「ケホケホ……な、何！？」

突然あたりに充満した煙。

けむい！けむすぎる！！

煙が晴れるとそこには10年後のランボがいた。

ああ、10年バズーカね。納得。

「やれやれ、オレがやるしかないみたいだな」

やらなくていいわよー。

風紀がすっごく乱れちゃってるんだからー。

「サンダーセット」

だからやらないでっば。

結局、リボーンの銃・隼人君のボム・ランボのミサイルランチャーが合わさり、巨大な爆発が起こった。

「ツナ!」

「しまった……」

「ツナ!無事なら返事をしてちょうだい!」

隼人君のほづを見ると、明らかに冷や汗がにじみ出ている。

後悔するならやる前に気付きなさいよっ!

「ツークーん」

弟の名前を呼びながら煙の中に入っていく。

「ゲホッね…姉さん…?」

「Wow, I found my brother!」

「10代目!」

え？壊れてないわよ。

至ってあたしは正常だからね！！

「でも、無事でよかった」

「うん、山本が引つ張ってくれたから」

「武君が？…そっか」

えーっと当の本人は…。

あ、いた。

隼人君がすごい形相（どんなだよ）で武君の元に歩いていった。

ケンカ！？それだけはアウトよ！？

「おい、山本」

隼人君が武君の胸倉をつかむ。

「お前をファミリーとして認めるぜ。10代目の家族を守ったんだ。
ファミリー
仲間と認めないわけにはいかねえ」

「ははっ。やっぱりお前っておもしれーな。けど、右腕は譲れねーぜ」

「な!？」

あれ?いつの間にかアタシの右腕の話に…?

もしもーし二人ともーっ。

……………ダメだこりゃ。

ま、

「ツナが無事でよかったわ。あなたがいなくちゃアタシ泣いちゃうもの」

誰!?

今ほんのちょびつとでも『ブラコンじゃね?』とか考えたのは誰!?

わーわー聞こえない聞こえない。

『沢田市はブラコンだー』なんて声、まったく聞こえませんよー。

とっつか言っな!

「10代目!」

「ひゃいっ」

こら!いきなり声をかけるから変な声出しちゃったじゃないの!

「10代目、ご心配をかけてしまって申し訳ございません!」

「わーわー怒ってない!怒ってないから土下座しないの!」

「ですが…」

「はい怒ってない、というか次土下座したら怒」

「10代目を泣かせてしまって……」

「……………」

泣いた？

誰が？

アタシが？

アハハ、冗談はよくないわよ隼人君。

このアタシが泣くわけ……あれ？

どうして目がぬれているのかしら？

泣いてた？

「うそお!?!」

「違う違う! きっとこれは埃が目に入ったからで!」

「すみませんでした!」

「あーもうっ。そんな事したらアタシの右腕だなんて言わせなくするわよ!」

その言葉で一瞬にして隼人君は立ち上がった。

隼人君の弱みゲット。

ふう、一件落着かな?

「そんじゃオレ、そろそろ部活に行かなきゃな」

「ゴメンね武君。危険な目に遭わせちゃって」

「いいっすよ。オレ、こーゆーの好きなんで」

ああ、この人の天然さが羨ましいわ。

どうやったらここまで天然になれるのかしら。

「それじゃ、部活頑張ってね」

姿が見えなくなるまで手を振り続ける。

わきとか絶対に見ない。

だって、隣の隼人君が怖いんだもん。

ち・な・み・に、リボーンは木の上で爆睡中!!

……………おい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9092y/>

もう一つの大空

2011年12月19日02時45分発行